梧桐会総会開催

5月12日(日) 於・大崎高校

日　時　5月12日（日）
12時30分（受付開始）
1時～4時
会　費　500円（新卒者は無料）
プログラム　会長の挨拶
学校長の挨拶
その他

新幹事（7年度卒）

A稲坂 徳朗　中村 布海
B鹿島 大碁　小森いづみ
C桐山 純一　鳥海 愛子
D小野 真悟　二宮 邦子
E新井 孝文　城之尾直子
F大湊 友樹　丸山 繭美
G徳永 善嗣　川口美友紀
H有賀 亮平　斉藤 幹子

梧桐会について

梧桐会 会長
川村　治

梧桐会の皆様には、如何お過しでしょうか。

日頃より同窓会の活動に御理解と御協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

平成八年三月をすぎ、今年も三三〇名卒業生が新しい梧桐会員として入会して参りました。

今日では会員数も一七〇〇〇名に近づく多人数の組織と成り、それぞれの会員の方々が実社会の各分野に於て大いに活躍をされている事と存じます。

梧桐会は会員相互の親睦交流と、併せて母校の発展に寄与する事を目的として、昭和十二年に設立されて以来、今年で五九年目を迎える事となりました。

しかしながら、会の組織が大きくなるに従って、本会の目的を充分達成する事が難しく、毎年の総会も出席者の人数が年毎に減少の傾向にあります。

原因の一つには執行部の体制が考えられますが、少しずつでも新しい幹事の方々に頑張ってもらい、何とか現状を改善して行きたいと考えております。

又、会員相互の親睦は卒業生同志で深められている為、同窓会の意義が薄れつつあるように思われます。会報により総会への出席を呼びかけておりますが、効果は不十分のようです。

会報につきましては、年一回の発行ですが、毎回、現・旧職員の方々に原稿をお願いし、又会員からの会員だよりや写真を掲載しておりますので、皆様からは懐しかったとの反響を頂いております。

今後共、会報を通じて大崎高校の同窓会に相応しい会員相互の親睦と連携を検討して行きたいと考えております。

皆様のご意見をお寄せ頂ければ幸いです。

梧桐会報

第42号

平成８年４月１日発行
発行所
梧桐会
東京都品川区豊町2-1-7
電話（3786）3355～6
都立大崎高等学校内
編集人　渡部良彦
発行人　川村　治
印刷所　日正印刷㈱

耐震・免震構造を取りいれた新校舎基本計画が決まる

全日制　校舎改築委員長
芦澤　正則

本校の懸案になっている校舎改築の進展状況をご報告いたします。

本校の校舎改築基本計画は、①恵まれた教育環境を活かした学校、②阪神・淡路大震災を教訓として地域の防災上の拠点となる学校、③地域の文化センターの役割を担える学校、の3点を柱としてすすめてきました。

②については、耐震・免震構造を取りいれた防災上のモデル校とすることを検討しています。③は、現在も校庭開放を実施していますが、校庭だけでなく、大教室(視聴覚機材を完備した)など学校の施設・設備も開放し、生涯学習の枠組に位置づけられた学校の観点から、地域の方にご利用していただくことを考えています。

この3つの柱を基本方針として、昨年度、改築担当の教育庁・財務局・都道補助26号線担当の建設局による、基本計画の住民説明会を3回行いました。

具体的な提案は、道路が学校の敷地内の真中を通過するため、道路に蓋をする形で人口地盤をつくり、盛土の部分と合わせ、6mの高さのグラウンドをつくります。

校舎は現在のグラウンドの場所に、7階建の全館空設備の学校にします。グラウンドには100mの直走路がとれるようにし、他に2面のテニスコートをつくります。(平面図を参照)

住民説明会での主な住民側からの要望や指摘は、6mの高さによるグラウンドからの圧迫感や騒音、トンネル内からの排気ガスの影響、高層建築による圧迫感、電波障害の問題などでした。

第3回の住民説明会で最終案が提示され、住民からの要望や指摘は、実施設計の中で、できる範囲で盛り込むことで了承されました。

今後の予定は、この基本計画に基づいて、平成8年度に実施設計をすませ、工期予定表に示したように、平成9年の10月から平成11年の11月までが校舎改築となります。グラウンド・外構工事、テニスコートの完成まで、足掛け8年の工事になります。

幸いなことに、本校はプレハブ校舎を利用しなくてすみます。また、グランドは、三菱マテリアル跡地を借りることになっています。

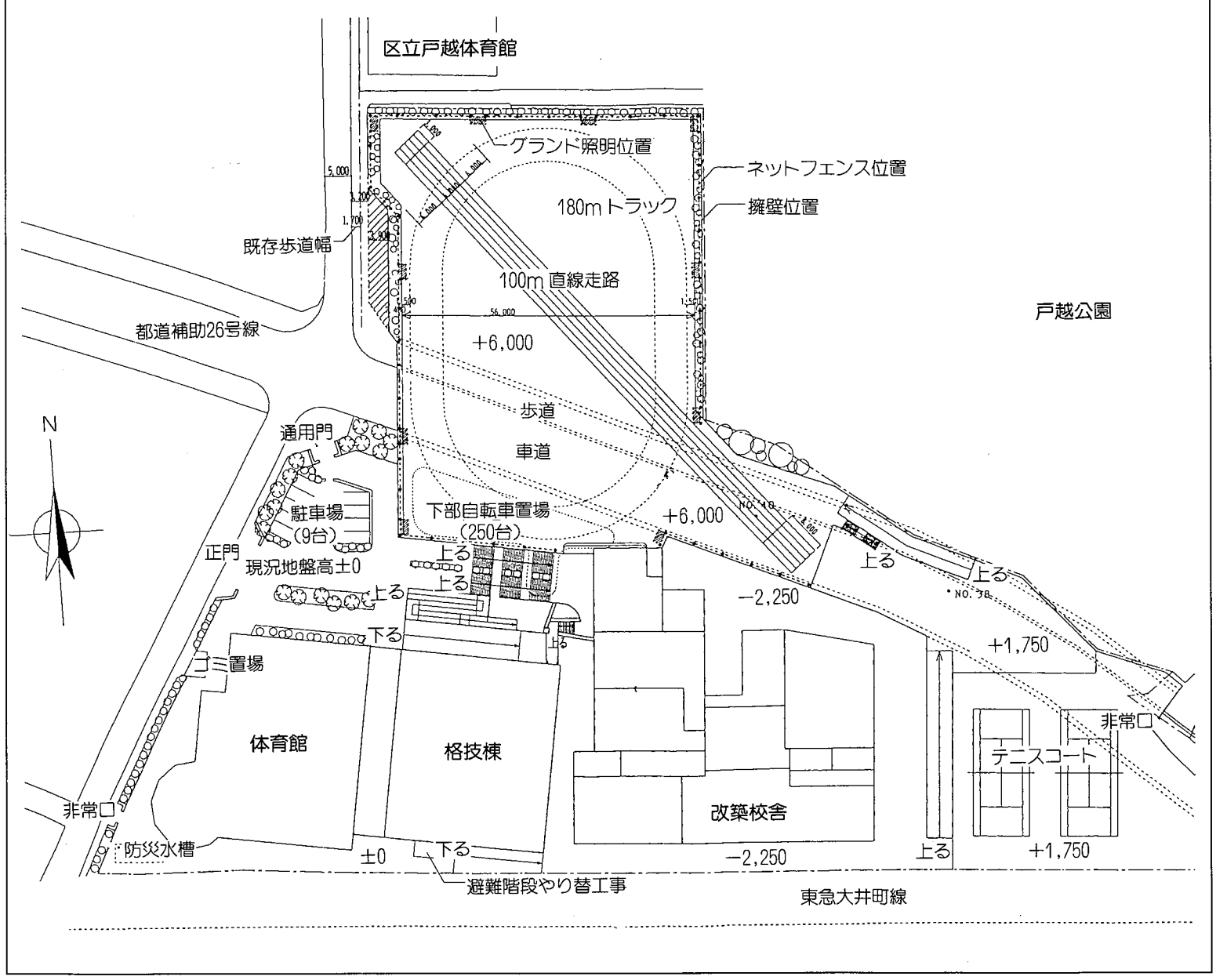
長い工期になりますが、完成した暁には、全国でも例を見ない素晴らしい学校になると思います。

梧桐会の皆様、期待をしていただくとともに、ご支援もお願いします。

工期（予定）

工事区分	H8	H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
仮設渡り廊下		6　10							
校舎改築工事		10		11					
校舎解体工事					6　11				
グランド・外構工事						3　9 グランド・外構			3　17/3 テニスコート
道路工事（学校敷地内部分）		10		12					

〔平面図〕



御挨拶

前学校長
上條　重夫

梧桐会の皆様には、日頃より母校への御支援をいただいておりますことに厚く御礼を申し上げます。

おかげさまで大崎高校の改築問題も、三月二十六日に第三回目の住民説明会を終えて、本設計へとスタートする事ができました。この本設計のスタートが一年遅れた時、少子化に向けて廃校とのうわさから、存続の署名運動を考えて下さった同窓生の保護者の方々、また、説明会で、学校改築に理解あるご意見を下さった元ＰＴＡ役員の方々、更に、地域の町内会長共に隣接住民を説得して下さった内藤都議や同窓会員でもある松沢区議の皆様に改めて感謝申し上げます。

私達も、地域の理解と支援を得、地域社会との連携の中で教育活動が行える学校を目指し、この一年努力して参りました。

一つは、地域に開放できる・地域が活用できる施設作りです。これは平成八年度の設計に生かせます。同窓会やＰＴＡの役員会が気軽に開ける会議室が有れば、同窓会役員会も学校で開くことができ同窓会の活性化にも繋がると思います。ぜひ、五月中に案をお聞かせいただければ幸です。

二つ目は、地域と共に歩む学校作りです。平成七年度にはＰＴＡ主催で「ふれあいフェスティバル」を行うことができました。これは、学校と地域が協力して伝統芸能の会を開き、地域の方々に観ていただくことでした。地元の箏曲の林先生と生徒のフルートの合奏・羽田高校のＰＴＡ会長の民謡の及川先生と同窓生伊東さんの民謡、更には本校ＰＴＡ学年委員長のおどりや生徒の和太鼓も加わり老人会の方々にも好評でした。この行事は平成八年度にも引き継がれて行きます。また、学校でも同好会でこの伝統芸能が取り入れられようとしています。

公開講座の面でも更に活発になり、地域の人々と生徒の共学の場が実現できれば、これこそが生涯学習の場であると考えております。

平成八年度は、これらの目標をより現実のものとして具体化すべく努力して参りたいと思っております。

私は、この三月末日をもって定年退職致しましたが、平成八年度からは、新進気鋭の柏原哲校長先生をお迎えすることができ、心強いかぎりです。

大崎高校の改築も本年度が今後の本校の在り方に向かって一番大切な場面を迎えます。今後とも変わらぬ御支援を賜りますようお願い申し上げますとともに、梧桐会の発展を祈り、御挨拶と致します。

職員だより

あの頃のこと

旧職員　村山　幸江

大崎高校を転任してから、早くも二十年の歳月が流れようとしています。毎年丁寧に送られてくる梧桐会報を手にする度毎に私の心の中を暖かなものが流れていくのです。

大崎高校に在職しましたのは、昭和四十一年からちょうど十年の間でした。前半はビートルズが来日し、その歌声が多くの若者を魅了した時代でした。また、三無主義という言葉が（それは無関心・無責任・無気力を意味するものでした）、高校生のあり方を象徴する言葉として流行しました。が、当時の大崎の生徒達は素朴で懸命に生きていました。三無主義という言葉の中には、むしろ彼等なりの反省・現状打破の気概が籠められているように思われました。

昭和四十六年から七年にかけて大崎高校にも学園紛争の余波が押し寄せて来ました。私は出産休暇の期間とかなり重なっていたせいか、もろにその波を被ることはありませんでしたが、熱病のように全国に広がっていった、いわゆる学園紛争が大崎高においてはどのような意味を持っていたのか、勉強不足のせいでよく分からないままで現在に至っています。

大崎高での十年間は、私的な面でも二人の子どもを出産し、育児に追われる日々でした。じっくりと勉強をしたいと思いながらも目先のことだけに追いまわされてしまったような時代でした。充実した授業が思うようにはできなかったあの時代の生徒の皆さんに申し訳なかったと思う気持が今でも心の中をよぎっていきます。

しかし、あの頃の大崎高は職員も生徒も総じて優しく暖かでした。当時の私のように仕事をしていく上でハンディ？を負った人間が無事に仕事が続けられたのは当時の先生方や生徒達のお陰だったと今さらながら思われます。

去年の夏、四十四年度卒の人達の同期会がありました。それぞれ生活の場は違っても、皆与えられた生をひたむきに生きている様子が窺えて、私も励まされるような思いで帰宅の途につきました。

大崎をふりかえって

旧職員　安井　幸生

昭和五〇年四月、墨田区にある商業高校から大崎高校に着任し、男女の生徒数がほぼ半々なことや自由服（私服）に戸惑いながら、大崎の生活を始めました。三年間クラス替えしない学年で、相原二三男先生や石岡康男先生、他の先生たちと和気あいあいの日々を過ごしました。開校記念日にクラス自主遠足をしたり、時々家庭訪問をしたりして、大崎には珍しいタイプの担任だったと思います。

昭和五三年度は、簾田先生の後を受けて三年生の担任となり、一年で卒業生を送りだす幸運にあいました。夏休み中は、午前に化学の補習、午後は野球部の練習と、大貫哲久先生とともに野球部にかかわっていました。

昭和五四年四月に新一年生の担任、一年から二年になるときクラス替えをした学年でした。学年を組んだ宮本哲夫先生や宮坂克子先生、他の先生方にいろいろお世話になりました。この学年を卒業させて、続けて七年間学級担任をしたことになります。

昭和五七年度から担任を外れ、ＰＴＡの役員さんとのお付き合いや校内の連絡調整など、学校全体を視野に入れる仕事が多くなりましたが、このことは後になってとても役に立っています。ＰＴＡの方が文化祭に出展したり、中学校に向けた大崎高校の紹介や学校説明会が始まりました。

この頃、長年話題であった道路問題は、大井埠頭埋め立て地への学校の移設や学校の敷地を二分する計画など、急に現実の問題となりました。同窓会初めＰＴＡの方々とも協力して、学校の環境に影響を与えないよう地下道路とする案を建設局に要望したり、都議会に陳情したりの大事件でした。

昭和六〇年三月、中島実校長先生の退職とともに大崎を去り、以来、学校を外から見るために区の教育委員会事務局や都立教育研究所、教育庁指導部で教育の仕事に従事しています。

大崎高校には自由の校風があると卒業生の皆さんが申します。学校生活のなかに細かい制約がないからでしょうか。自由の意味は多様です、勝手でよいなどと解釈しないで欲しいと思います。私の在職当時、多くの事を自主的に判断し行動する校風がありました。指示待ち人間の増えている今の社会のなかでは、とても大切な気風だと思います。

大崎高校の十年間は、私の教師生活の最盛期のように思っています。酒と野球が好きで子煩悩な、今は亡き伊佐憲二先生を偲びつつ大崎を振り返ってみました。

私の教員履歴雑感

現職員　鈴木　幸雄

あと一年で退職を向かえる時が来た。思えば私は「馬食」であったと思う。

初めての教員生活は、大田区立糀谷中学校であった。生徒とは良く遊び、毎日帰宅は9時～10時と遅く、学期の終り頃はどなり過ぎて声が出なくなった。

生徒指導が大変なことと、教員になってから、学生時代にあまりしなかった数学の勉強がしたくなったという理由で、中学校から高校の教員になった。

現在の東高であるが、当時は浅草高校という定時制の高校（現在の代々木高校と同じ）に赴任した。

授業は午前中のみであったので結構時間に余裕があり、生徒とは良く遊び、先生方とは良く飲んだ。

大学の聴講を希望して真面目に取りくんだつもりであったが、教室の一番前に席を陣取った後、30分間はもったが、その後は机とキスをしつゞけた。結局聴講生は不成功であった。

次に同じ職場の数学の先生と読書会をもった。1対1の真剣勝負で、一年間に一冊ぐらいのペースではあったが、大変為になった。

研究日は大学の聴講の時で疲れきった状態であったから無理があったが、読書会は研究日の午前中遅く起き、体を休めることが出来たことが良かったと思う。

浅草高校が浅草から江東区の東砂町に移転して、全日制の高校になった。定時制の卒業生や東高の初めての卒業生達とは今でもクラス会を定期的にもっている。

これらの人達は私の無形の財産である。

11年間勤めた後、希望して八丈島の八丈高校に赴任した。

島の人達に大切にされ、私の住んでいた部落の運動会の応援団に飛び込み応援をやったり、ほとんど毎日、酒づけであった。

部落の人達との交流も私の財産である。

5年間島で勤務した後、浦田高に8年間勤め、その後大崎高校に赴任し、来年1年間勤めると10年になる。

蒲田高で勤めた時も大崎高で勤めている現在も、大変良い仲間に巡りあえて楽しい仕事をさせてもらっている。

しかし、昔と違う点は生徒と遊ぶ時間が少なくなっていることである。年を取り過ぎていること、責任のある仕事が前より多くあるのが原因と思うが、気力の減退が大きな原因と思う。

私は子供達とは機会を見つけて遊ぶことが大切と思う。

責任ある仕事をなるたけ避けて生徒や、仲間の先生方と遊びつゞけて来た。そのつけが今になってきいて来て、何も仕事の出来ない馬鹿な教員がもう一年で停年を向かえようとしている。

教員という恵まれた職業について、私は生かされて来たと思う。

仲間にも迷惑をかけ、仕事では救われて来たし、生徒にもむしろ教わって来た。あと一年間仕事が残っている。

良い仕事をしようと思う。

……良く遊びながら。……

教職員の転退

退　職

上條重夫（校長）
稲浜　馨（司書）
入住和良（嘱託・事務）

休　職

佐藤純子（音楽）

転　任

齋藤教子（教頭）　目黒高校長

着　任

相原　哲（校長）　山吹高校
平田　晃（教頭）　豊島高校
門田直子（国語）　大島高校
松田和之（数学）　狛江高校
原田伸子（音楽）　京橋高校
佐々木友子（英語）　京橋高校
村野浩之（物理）　神津高校
佐藤政嘉（理科）　桜水商業高校
土屋知子（事務）
島田忠夫（用務）

栄井和幸（国語）　本所高校
平出明弘（政経）　小岩高校
山田信行（数学）　松原高校
松本　勇（英語）　城南高校
葉山栄美子（理科・助手）　武蔵が丘高校
小堤孝夫（嘱託・国語）　文京高校
田口八七江（用務）　蒲田高校

平成七年度卒業生 進路状況

（四月十八日現在）

進　学

四年制大学

東京都立一　杏　林一
川村学園女子一　淑　徳二
湘南工科一　城西国際二
洗足学園一　大　正一
大東文化一　玉　川一
帝　京一　東　海一
東京家政学院一
東京家政一　東京経済一
東京国際一　東京農一
東　洋三　二松学舎一
日　本四　法　政四
フェリス女学院一
立　正一

四年制大学計三十三

短期大学

東京都立一　青葉学園一
青山学院女子一
大妻女子一　神奈川一
川　村一　共立女子二
国　際一　国士舘一
駒　澤一　駒沢女子一
産　能六　杉野女子一
聖　徳一　洗足学園二
創価女子一　拓　殖一
鶴見大学女子二
帝　京三　帝京女子三
東　海二　東京女学館一
東京女子体育一
東京成徳二　東洋女子一
東横学園女子五
富　士二　文化女子一
文教大学女子一
文教女子二　宝仙学園一
武蔵野女子一
目白学園女子二
山野美術芸術一
横浜女子一

短期大学計五十五

専修・各種学校計一一六

就　職

旭光電気　昭和ネオン
マツモトキヨシ　伏　仲
日本緑茶センター
アンジェロ　山　九
大沢証券　當木工事
ブランド・アイ
東京ビューティーセンター
マキヤ商事　昭和大学
センス（美容師）
資生堂パーラー　常盤軒
自　営　国家公務員

同期会顛末記

（昭和44年度卒）

芳賀　正隆（須山）　くみ子

「もしもし、原田です。」受話器を取った途端例の声。一瞬、いやな予感が頭をよぎる。「同期会を計画しているんだけど、お前暇か？」「待てよ、俺達の年代で今時暇なやつなんかいるもんか。」

聞けば、同期の前田（現姓落合、以下同じ）と北田（鈴木）から同期会を開きたいと話があったそうな。彼女達の話が今回の同期会の発端となった。原田からの電話があったのは、去年の始め頃だったと思う。

原田側の予定を聞いたところ6月初旬を予定しているとのこと。早速、前回の資料を引っ張り出し、参加人数（80人）を確認しながら、会場、日時等について大まかな話をまとめる。

西大井駅前のメイプルセンターに6月18日の会場が確保できた5月初旬から原田と相談を重ねると共に、往復葉書の印刷・発送作業に入る。しかし、転居先不明による返送が多いうえに返事の戻りが悪いこともあり、各クラスから1名程度を頼んで返事のない者等への電話連絡を依頼する。これと並行して、心当たりを頼って追跡調査を行い、10数人の所在を確認して出席を依頼した。その結果、1週間程前には80名程度の出席者を確認できた。

当日は、旧担任の村山、志村、田島、堀井、及び宮本先生を含め76名が参加した。好天に恵まれたうえ、諸先生方のご出席を戴けたおかげで盛会に催すことができた。

卒業から25年、前回の同期会からでも既に8年を経過しており、受付で名前を聞いても顔と一致しない者も少なからずいた。こんな次第なので、一計を案じ予め会場内に卒業アルバムの写真を拡大コピーして貼っておいたのが随分と役立った。拡大コピーの周りにヒは沢山の人だかりができ、各人各様の新旧比較が行われていた。若いと思っているのは自分ばかり、他人が自分のことをわからないということは……。

会場では、あちこちに話の輪かでき、時間がたつのも忘れて昔話に興じていたが、あっという間に予定の時間が過ぎてしまった。最後に全員及びクラス毎に記念撮影（写真は後日参加者へ郵送）をしてお開きとした。

後日談によれば、二次会にはかなりの者が大井町へ繰り出し、最終電車で帰宅した者もいたとのことであった。また、中には実家に泊まる予定で参加したり、ホテルを予約して参加した剛の者も居たそうである。

今回の同期会に関しては、上記の他にB組大越、C組小川（松本）、木下（光用）、田畑（鈴木）、D組浅見（伊藤）H組渡辺及び熊井夫妻等、少なからぬ同期生の手を煩わせたことをお礼の意味で記し、報告を終えたい。

尚、同期生名簿については分かる範囲で作成してありますので、ご希望の方はご一報下さい。住所変更や同級生の住所の解る方は、〒一四〇品川区西大井五―五―八―三〇三、芳賀正隆・くみ子　☎〇三―三七七五―一九〇六までご連絡下さい。

熊井　健二（太田）　真知子

二十五年ぶりの同期会。毎年、同窓会はあっても、同期生同士の夫婦なのに一回しか出席しなかったのに、縁あって手伝うこととなりました。同期会通知の返信が来なかった人に、一人ずつ実家に電話をし、転居先を教えてもらって電話をし、やっと話す事が出来たり、本人が電話に出ても、かすかな記憶の中で、手さぐりで話をして出席を願ったりしました。時間と手間のかかる作業ではありましたが、なつかしく、皆の近況もわかり、当日欠席でも協力を申し出てくれたりと有意義な数日間でした。

当日、受付をしましたが、二十五年という年月は……。人様々でした。クラス会ではなく、同期会ということで、初めからわからない人は別として、年相応に見えて、誰だかわかるまで時間のかかった人や、昔と全然変わらない人等、男女共、年のとり方は一人一人違いますね。しかし、話をするとすぐ昔の高校時代に戻って、はしゃいでしまいました。又、同じ部活だった人達の話の輪もはずみました。何よりも良かったのは、先生方が御健在で出席して下さったことです。皆さん、若々しく、昔とあまり変わらず、私達の方が先生方に近づいた感じがしました。昔の私達の声もよく覚えていて下さって、うれしく思いました。会場いっぱいに話の輪がいくつも出来、用意した料理に手をつける間を惜しんで、あちらこちらで笑い声が絶えず、手作りの同期会は大成功に終わったと思います。というのも、二次会は最初から予定していなかったのですが、大部分の人が行くというので、その場所探しが大変で、ビアガーデンに落ち着く事になりました。風が強く、肌寒い中ビールという場所でしたが、一次会が立食だったので、いすに腰を下ろしてゆっくりと話が出来たのは良かったです。この頃になると、高校時代顔は知っていても話をした事がない人とでも話が弾み、皆、このまま立ち去り難く、三次会へと突入していきました。人数を考えると場所探しが大変でしたが、幸運にも一軒の店を貸し切って、ゆっくりと飲みながら、食べながら、先々のクラス会の話など話が発展していきました。この後も四次会へ行く人達がいましたが、残念ながら、私達夫婦は柏で待っている子供達や終電の事を考えて帰ることにしました。本当は一人で残って最後まで皆とつき合いたかったのですが…。

同期会実現まで皆の努力がありましたが、喜んでくれる人達が大勢いて、本当にやって良かったと思います。年を取って体が動かなくなる前に、いいえ、ここ数年のうちに、又、開く事が出来たらと思っています。その時は最後まで……。

会員だより

裁縫学校の頃

野村　のぶ（落合）（昭和元年度卒）

会員だよりに原稿をと云ふ書面を頂き書物を致しません私驚き、とまどいました。会報を頂き学校の有方を読んでも教職員の異動を読んでも余りに時が離れすぎて理解する事も覚える事も私にはむづかしい思でございます。

私の頃は裁縫学校の事とて学科は少々修身、国語、音楽、作法、壹道、家庭科の六科目で残は全部裁縫でした。

先生は二人、校長は第一日野の校長の兼任でした。伊藤静恵先生が赴任されてから内部も変わり科目も、生花が加りました。仁戸田一應と云ふ方でした。私は卒業も続けて師範の許まで頂きました。私が卒業してからですが伊藤先生の功労により高等女学校に昇格になりました。お祝いの式典が夏の暑い時に行われました。出席致しました処伊藤先生より、お祝いの言葉と云はれ何を申し上げた事やら冷房もない時代に和服で汗を流した事を覚えて居ります。今思い出しても首筋の暑くなる思いです。

一日とて伊藤先生よりお叱りを受けない日はなく谷田先生を困らせて居りました私の学年も卒業になります時に、御病弱であらせられた大正天皇が御病、篤く明治神宮や皇居前での私達の平癒祈願も空しく御崩御遊ばされました。御大葬に参列する事になりました。總代は先生三人生徒五人父兄五人、二月の寒空に一日がかりで砂の上に座り夜中の事とて其の寒さ身にしみた事は云い表わせません。童子にかつがれた「ろぼ」の金具の音、輪足の砂の上をきしむ音、衣冠束帯の一木密相の足どり陸軍大將正装の秩父宮殿下、海軍大將の高松宮殿下、くらやみの中を行くお列荘厳とも有難いとも感極りました御大葬に参列させて頂きました事は私の八十余年の生涯で一番思いで深い事です。

写真右から、二女主人、二女、長女、私。
渡ヶ島・真知子橋にて

生きているということ

石田　美樹（加藤）（昭和53年度卒）

高校を卒業してから、ほんとうにあっという間の十数年でした。そのほとんどを神戸で暮らしてきた私にとって、中でも'95年は、阪神淡路大震災という思いがけない出来ごとに会い、ふりかえる間もなくかけ足で過ぎた気がします。

亡くなった知人、家を失った親せき、焼けただれた街並み、くずれ落ちたビル、戦争でも始まったかのようなたくさんの自衛隊のトラック……心の痛む、今でも信じられないような光景でした。幸い我が家の被害はとても少なく家族も全員無事でしたけれど、水がでない、ガスが来ない、電気がつかない、電話が通じないという不安な数日間に、日常のあまりにも便利な生活の裏の大きな落とし穴を思い知らされた気がします。

大震災という心をゆさぶれる出来ごとに生きるということ、幸せということをあらためて考えさせられました。

この春、長女が小学校生活を終え中学へと進みます。卒業式の日子供たちが口ずさんだことばの中に谷川俊太郎の、生きる、という詩がありました。

・　・　・
生きているということ
いま生きているということ
それはのどがかわくということ
……
くしゃみすること
あなたと手をつなぐこと
……
泣けるということ
笑えるということ
……
あなたの手のぬくみ
いのちということ
・　・　・

長い詩だったのですが、子供たちの輝く未来と震災の光景とが重なって思わず涙ぐんでしまいました。

ところで、実は私、卒業してから一度も大崎高校へ行ったことがないんです。このへんで少し立ち止まってなつかしい思い出にひたるのも、生きているということになるかもしれませんね。

この次帰京したら、大崎高校にぜひ寄ってみようと思います。なつかしい田園都市線に乗って。

（大井町線は、昭和38年10月～52年5月までの間、田園都市線と言っていました）

疾風怒濤の時期

小林　則之（昭和50年度卒）

私が大崎高校を卒業したのは、今から20年前のことです。10年前をひと昔と言うなら、20年前はふた昔、年月で数えると高校時代は遥か彼方の遠い思い出の様でありますが、私の意識の中ではついこの間のことの様に思われます。

それは、高校時代が今までの人生において、何の苦労も無く毎日が楽しい時期だったからであり、又逆に、将来に対する確固たるものなど何もなく自分は将来どうなるのか、何をすればいいのか、生涯の仕事として何を選ぶべきなのか、つかの間の、将来に対する希望と不安で悩んだ時期だからこそ近い過去の様に思えるのかもしれません。

梧桐会会報の原稿依頼によって、自分にとって高校時代とはいったい何だったんだろうかと改めて考えさせられました。

突き詰めて考えるみると、自分にとって高校時代とは、多くの人たちがそうであった様に進学の為の一ステップであり、受験勉強の場という気持が大半を占めていた気がします。その様な状況の中で、多くの友人に出会い、また多くの先生方に教えを受け、そして多くの事を学び人生の視野を広げた時期であった様に思います。よく人は、人格形成の時期は高校時代であったと言いますが、確かに物事に対する考え方や姿勢は高校時代に形づくられたと思います。

高校時代に強い影響を受けたものは沢山ありましたが、その中の一つに宮崎尚克先生の倫理社会の授業がありました。宮崎先生の授業は、その独特の語り口調と毎回の授業で配布されるガリバン刷りの資料など先生の授業を受けた者には忘れ得ないものがあると思います。私は宮崎先生の授業が毎回楽しみでした。特に古代ギリシャ哲学やドイツ文学の話は、平凡な学生の知への憧れか真剣に聞き、授業の後は何か賢くなった様な気がしたものです。タレスの「アルケー」、プラトンの「イデア」、アリストテレスの「エイドス」とか、ゲーテの「若きウェルテルの悩み」、キルケゴールの「死に至る病」、また「狼に育てられた少年の話」など、今でもその授業が鮮明に脳裏にやきついております。そして宮崎先生の授業を通して得たことは、「自分の頭で考えることの大切さ」ということです。以来、物事を真剣に誠実に思索できるようになつたのは宮崎先生のお陰だと思っております。また、十数年前の新婚旅行は迷わずドイツを選びました。フランクフルトのゲーテハウスで、ゲーテが使っていたという机にじかに触れた時、又ハイデルベルグでネッカー川のほとりに立った時、宮崎先生の授業を思い出し感無量であったことを記憶しております。

20年の歳月を経て、梧桐会会報の紙面にて密かな胸のうちを打ち明け心から感謝できることを嬉しく思います。大崎高校、そして宮崎先生ありがとうございました。

神戸に根づいて三十余年

隋　敏子（高）（昭和33年度卒）

昭和三十三年度卒業の同期の皆様如何おすごしでしょうか。三年C組のなつかしいクラスの方々の顔が浮かびます。なかよくして戴いていた旧姓木幡さん、成川さん、伊藤さん、鈴木さん、金高さん、武井さん、皆さんお元気でしょうか。もうおばあちゃんになっている方もいるのでは……。担任だった高橋、岩井両先生、なつかしいです。お会いしてみたいです。

大分前ですが、同期会に初めて出席しました折に、宮本先生にお会い出来、とても嬉しく思いました。私在学中は劣等生で、特に数学は全くダメで、追試をを受けた事、今でも時折数学のテストを受けている夢を見て冷や汗が出て胸がドキドキします。ピタゴラスの定理が問題に出るよと事前に言っていただいたのにもかかわらず「出た！」と思った瞬間、頭がまっ白になってしまい、書けなかった事、恥ずかしい事続きの学校生活でした。

二十三才で見合い結婚、この地神戸に根づいて三十余年、三人の子供にも恵まれ、北は山、南は海の温暖で、人の気持のかよい合う住みよい所ですが、この度の阪神淡路大震災で、三ノ宮を始め、東西九区の全ての街なみが一瞬のうちにガレキの山、火の海となり、沢山の貴い生命が失われました。今思っても信じられない悲惨な体験は、心に焼きつき少しの物音や振動にも敏感に反応してしまい、大人も小人も癒されない傷を負ってしまいました。この貴重な体験を語り続け、のちに残さなければいけないと思います。生き残った者として、生かされた命を有意義に、そして一日一日を大切に生きて行きたいです。

寄付のお願い

一口500円として、次の方法でお送り下さい。同窓会の当日も受付けております。

郵便振替 00170-0-614506
（加入者名　大崎高校梧桐会）

編集後記

◇とうとう夜が明けてしまった。現在四月二十日午前六時三十分を回ったところである。何度か睡魔に襲われたが、何とか頑張った。夜中降り続けた雨は、止みそうだ。

◇梧桐会報42号をお届けします。会員だよりの野村のぶさんは、恐らく同窓生では最高齢と思われるます。また、阪神淡路大震災から一年余り経過したので、神戸市在住の方何名かに原稿を依頼したところ、お二人から原稿をいただけました。貴重な体験を書いていただき、あらためて地震の恐ろしさを思い知らされました。

◇昭和44年度卒業生の同期会、その準備の苦労話等、これから同期会を開こうとする方々には大いに参考になると思います。おかげで名簿も充実し、次回名簿発行に向けての貴重な資料となりました。同期会やクラス会等を開いたら、ぜひ報告と名簿をお送り下さい。

◇ひとつ個人連絡。ドイツの横山さん、ご指摘の通りです。

（なべちゃん）